

山と薪と馬に目覚めた 遠野の若手たち

NPO法人遠野エコネット「薪の駅プロジェクト」

文 編集部 写真 高木あつ子

卵型薪ストーブを囲む伊勢崎さん一家。横浜生まれのまゆみさんが焚きつけする姿もすっかり板につき、いまでは薪割りもする



遠野市の位置
内陸部の盛岡市、花巻市と釜石市など三陸の各都市を結ぶ要の位置にあり、東日本大震災のあとには被災地支援の前線基地となった。森林面積は市の総面積の8割以上を占める。コナラ・ミズナラ・ブナ・クリなどの広葉樹が自生し、スギ・アカマツ・カラマツなどの針葉樹が植林されている。

木を捨てたままにしておくなんて

「薪の駅プロジェクト」の発端は、NPO法人遠野エコネット代表の千葉和さん(49歳)が、スギ林に積み上げられたままの材について仲間と話したことだった。

岩手県では荒れていく人工林を再生しようと、2006年から一人あたり年間1000円の「いわての森林づくり県民税」を集めて間伐を進めているが、搬出しても採算が合わないため、7割が「切り捨て間伐」(通称「ステカン」)になっているという。

「切り捨て」といっても、この事業では、木を積み上げるのが条件になっている。作業をした人たちも、長さ2m弱に切りそろえてきちんと積まれた材が、そのまま腐っていくのを目にするのはつらいということだ。あの材をせめて薪として使うことはできないだろうか。

千葉さんの家では以前から薪ストーブで暖をとって、薪ボイラーで毎日風呂を焚いている。めっきり少なくなったとはいえ、遠野には薪ストーブや薪風呂を使う家がまだまだある。

間伐材のほとんどはスギ。スギの薪はススが多くて煙突掃除が大変だとか、高熱になりすぎてストーブをいためるとよくいわれるが、遠野の人たちが「ダルマストーブ」と呼んで愛用する、鋼鉄製の卵型ストーブならたいして気にならない。

山に捨てられたままになっているスギの間伐材を運び出し、薪に加工して販売したらどうか——とまあ、そんな話が盛り上がりつつ「薪の駅プロジェクト」の活動がスタートしたのが、2010年の9月のことだった。

「薪の駅プロジェクト」始動

まずはエコネットのメンバーが軽トラに乗って、森林所有者から搬出許可を得た山に入り、間伐材を集めてくる。軽トラが入る道まで運んで積み込むのだが、短いといっても間伐材はめっぽう重く、積み下ろしは重労働だ。これを土場(木材を搬出するときに一時的に集積する場所)まで運び、40cm長に玉切りし、薪に割る。それを束ねて完成だ。

土場をそのまま「薪の駅」として、薪を販売することにした。価格は1束200円。11月、12月には「道の駅 遠野風の丘」でも販売した。市内にチラシを配布し、「道の駅」を会場に薪積み・薪割り体験イベントを開いてPRにもつとめた。宮城県のホームセンターでも、1束100円の格安価格ながら、芋煮会用に試験販売した。

実際にやってみると、薪を束ねるのに大変な労力がかかるので、束ねずに軽トラ1台分

の薪を5000円(配達料1000円)市内限定)で売るなど、販売形態もいろいろ工夫した。

2010年の売り上げは14万円。薪を乾燥する時間がなくて、品質がいまひとつだったこともあるが、遠野の薪ストーブユーザーは自分の山を持っている人が多く、リング園からは剪定枝も手に入る。いくら安くてもスギの薪がそうそう売れるわけではない。

幸い岩手県の「提案公募型県民協働モデル事業」の助成もつき、チラシや関連イベントの経費は捻出できたが、材を運び出し、薪にする労力に見合ったおカネを稼ぐのは容易なことではなかった。

「薪の駅プロジェクト」を事業化する道はなかなか険しいが、大きく変わったことがある。それはエコネットのなかで新たに薪を使う仲間が出てきたことだ。

若夫婦の家に卵型ストーブがやってきた

伊勢崎克彦さん(38歳)とまゆみさん(36歳)は「薪の駅」のすぐ隣の一軒家を借りて住んでいる。3部屋の平屋建ての母屋に作業小屋がついている。裏にはほどよく光が入る雑木林があり、春にはウド、フキ、シドケ、葉ワサビなどの山菜が、秋にはキノコが生える。前の畑では、家主が植えたモモ、ナシ、カキ、アンズなどの果樹が実をつける。狭いながらもお気に入りの家だ。

暖房は石油ファンヒーターを使っていたが、「薪の駅プロジェクト」がスタートしたのを